

病氣と医学

前述の如く、私は反文明の原因としての、戦争と病氣の二大苦を挙げたが、其外に今一つの貧困がある。然し之は戦争と病氣とが解決出来れば、自然に解決さるるものであるからかかないが、先ず戦争の原因から説いてみると、之は勿論精神的欠陥即ち心の病氣にあるので、之も肉体の病氣さへ解決出来れば、共に解決さるべきものである。

右の如く病氣も、戦争も、貧困も同一原因であるとしたら、真の健康人即ち靈肉共に完全な人間を作ればいいのである。然し斯う言えば至極簡単のようであるが、実は之が

容易でない事は誰も想像されるであらう。然し私から言え
ば、決して不可能ではない。何となれば必ず解決出来得る
だけの方法を、神から啓示されているからで、之が私の使
命でもあり、其一段階としての此著である。

従つて先ず病氣なるものからかいてみるが、病と言つて
も前述の通り、肉体と精神との両方であるが、現代人は普
通病とさえ言えば、肉体のみのものと思つている処に誤り
があるので、此精神の不健康者こそ、戦争の原因となるの
である。其様な訳でどうしても人間が肉体と精神と共に本
当にならない限り、眞の文明世界は生れないのは言う迄も

ない。ではどうすればそれが実現され得るかという、それには勿論其根本が解ると共に、可能の方法も発見せられなければならぬ。処が私はそれに関する根本義を発見し、而も絶対解決の方法迄も把握し得たので、茲に詳細徹底的にかくのである。それに就いては先ず吾々が住んでゐる此地上の実相から解いてみるが、元来此地上の一切、今日迄の学問では物質のみの存在とされており、それ以外は無とされて来たのである。然し此考え方たるや非常な誤りであつて、無処ではない。人類にとって之程重要なものはない程のものが、確実に存在している事である。にも拘

はらずそれが何故今日迄分っていなかったかという、全く唯物科学にのみ依存して来た結果であるからで、即ち唯物科学に於いての理論は、見へざるものは無と決めていた以上、之程進歩したと思われる唯物科学でも把握出来得なかつたのである。右の如く唯物科学で知り得ないものは、悉く否定の闇に葬つて了つた其独断的觀念こそ、学者の頭脳なるもののいとも頑な偏見さである。之に就いては多くをいう必要はあるまい程、人類の幸福が文化の進歩に伴わない事実である。それを之から漸次説き進めてみよう。

以上説いた如く精神と肉体共に完全なる人間を作るのが眞の医学であるとしたら、現代医学は果して其目的通り進んでいるであらうかを茲で検討する時、それは余りにも背反している事実である。それ処ではない。寧ろ病氣を作り、病人を増やしていると言っても過言ではない程の誤りを犯している事で、それを之から詳しくかいてみるが、先ず医学なるものの今日迄の根本的考え方である。というのは医学は病氣の原因が全然分っていないから、凡べて反対に解釈している。勿論唯物科学本位で進んで来たものとするれば致し方ないであらう。

右の結果医学は病氣の場合外部に表われたる苦痛を緩和するのみに専念している。従つて医学の進歩とは一時的苦痛緩和法の進歩したものであつて、其方法として採られてゐるものが彼の薬剤、機械、放射能等の物質の応用である。成程之によつて病氣の苦痛は緩和されるので、之で病が治るものと誤認し、緩和法を続行するのであるが、事實は苦痛緩和と病氣の治る事とは、根本的に異うのである。即ち前者は一時的で、後者は永久的であるからである。而も其苦痛緩和の方法自体が病を作り、病を悪化させる結果なのであるから問題は大きいのである。

何しろ唯物的医学であるから、人体も単なる物質と見るのみか、人間と人間以外の動物をも同一視するのである。それによって動物を研究資料として、病理の発見に努め、偶々何等かの成果を得るや、直ちに人間に応用するのであるが、之が非常な誤りである。何となれば人間と動物とは形も本質も内容も全く異っている事で、之に気が付かないのである。此理によって人間の病氣は、人間を対象として研究されなければならない事は余りにも明かであって、之以外人間を治す医学は確立される筈はないのである。そうして今一つ斯ういう点も知らなければならぬ事は、動物

には人間のような神経作用がないが、人間には大いにある。人間が神経作用の為に、どの位病気に影響するか分らない。例えば一度結核と宣告されるや、此一言で患者の神経は大打撃を受け、目に見えて憔悴する事實は、医家も一般人もよく知る処であらう。処が動物にはそういう事が全然ないにみても肯れるであらう。

以上によって見る時、現代医学の欠陥は、霊と体で構成されている人間を、霊を無視して体のみを対象とする事と、人間と動物を同一に視ている点で、之が主なるものである事を知らねばならないのである。